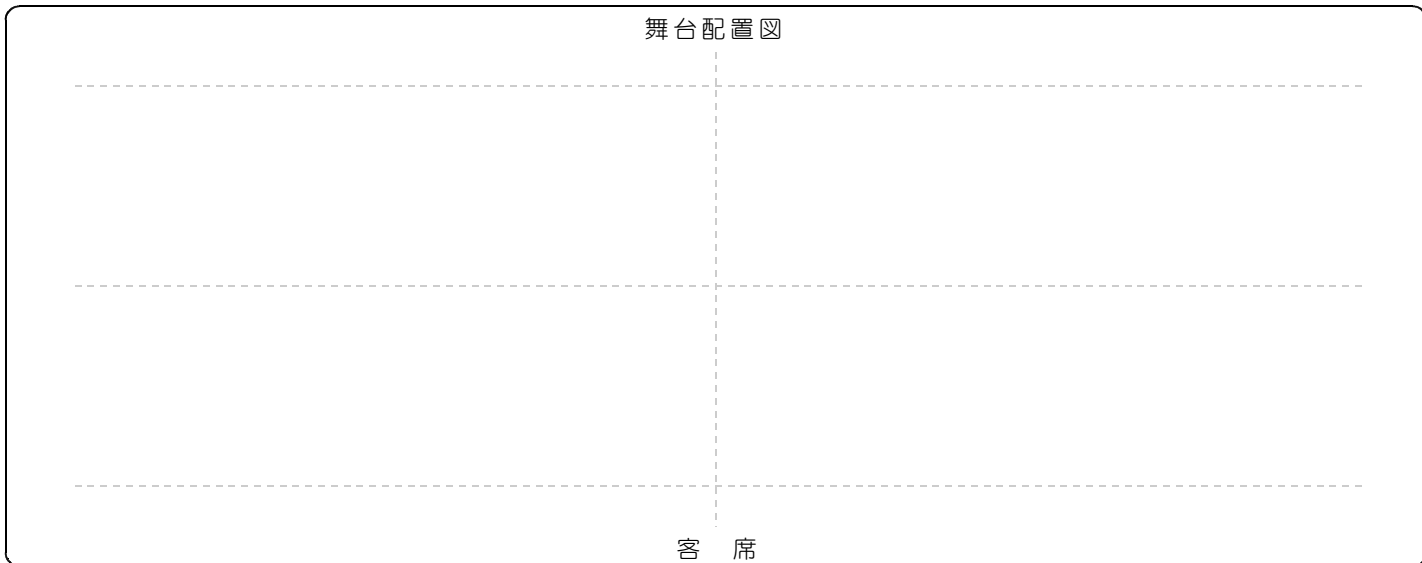


No.	URUMA	演奏者数	演奏時間
-----	-------	------	------

舞台配置図



客 席

表示記号一覧	一 箏	= 17絃	+ 三絃	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

調絃表	ピッチ A=44				編成：1箏					2箏			3箏	
Part	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾	
1 箏	E°	A°	B°	D°	E°	G#°	A	B	D	E	G#	A	B	
2 箏	E	G#	A	B	D#	E	G	A	B	D#	E	G#	A	
3 箏	E°	E°	G#°	G#°	A°	A°	B°	B°	D°	D°	E°	E°	G	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾	

編成欄には面数を記入 開始調絃は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

作曲年 1994年 委嘱者 沢井一恵 構成 箏 I・II・III 時間 一 出版楽譜 ミュージックエス

解説 「うるま」が琉球をさす言葉として使われ始めたのは今から四百年前のことらしい。本土でも「うるま」を琉球とする考えが一般的であったようだが、後になって「うるま」は琉球ではなく新羅の「属島」であることの解釈が生れたり、「徳之島」がそうだとか、否それは「台湾」だ。という説もあるというのを何かの本で読んだことがある。が思えば、それは人々の心に描かれた幻の島であったのかもしれない。人はその幻の島にどんな想いを馳せたのであろうか、また島は何を人々に語ったのだろうか。1994年作曲。[作曲者] 収録媒体 一